

発表 ③

今 考えていること

石黒 完二 (63)

自然農歴 30 年

富山自然農に学ぶ会主宰

畑 3 反 (休ませながら 2 反程度作付)

田 1.3 反

幼い頃、喘息で、息ができないときに感じていたこと「なんでこんなに苦しいのに生きていかなあかんのかなあ……」

1989 年 6 月、奈良の川口由一さんの田んぼの畦に立ったとき、何かに感応して、自然農を始めることにしました。当時、愛知県で有機農業での産直をしていましたが、納得がいかず、自然農を実践できる地を求め、ここ富山県に越して 30 年になります。

当地では、自給自足的な暮らしをと、薪やランプの生活を始めました。気候条件は、山間地の豪雪地帯、子供も次々と生まれ、日々やることも多く、初めてのことばかりで、夢中で過ごしてきました。今では、ここでの生活にも慣れ、子供 5 人も次々と巣立ち、妻と 2 人で過ごしています。

自然農の放棄された田畑の整備から始まり、5 年ぐらまでは、ほとんどうまく育てられず、10 年、15 年と過ぎたあたりから少しずつできるようになりました。自然農の理念の理解はまだですが、今はそれなりに、育てられるようになりました。

ところで、私には幼い頃から感じている漠としたもの、……不安、おそれ……があります。それはいったい何なのか、どういうことなのかと考え続けてきました。そのこのころの今を、川口由一さん、池田晶子さん、野口晴哉さんらの言葉を借りて少し書いてみたいと思います。まだまだ、まとまっていませんが、ご容赦下さい。

「人という生きものは どういうもので どうあったらいいか」 「真、善、美」

「私とは何か」 「どう生きるか より 生きているとはどういうことか」 「存在するとはどういうことか」 「生死、宇宙、善悪」……

「大安心の境地」

生きていることに疑いが入らず、心が解放されている。

いつも澁刺と生き活きと、自分が生きていること そのものが快く、苦しいことにも、ぶつかっていける。

私の場合は、自分を主張していないと消えてしまいそうで不安で、自分の生きていることに自信が持てないところもあり、自分を治めきれいていません。

現象として、自己本位、自己中心、自己顕示、自己主張……、

原因として、自己肯定感の欠如、自信不足、存在の不安感……が考えられます。

人間の行為、行動と感性（感受性）との関係を考えてみますと、過度の感情の抑圧は感性の働きを妨げ、行動に影響すると思われます。

たとえば、いじめや虐待といった、人間関係から生じる抑圧、

不本意な強制感や命令感からの行動にともなう抑圧、

小さなことでも積もって絡まってしまうことによって生ずる抑圧、

といろいろあると思いますが、そういった心の傷が潜在意識や潜在感情に取り残されることが、行動と関係があると思われます。人間には、心の動く方向に無意識に意識が動いてしまい、それで行動する傾向がありますので、まずは、心の奥に取り残された、負の感情を開放する必要があります。

自分を縛っている潜在感情がどのようになっているのか、感情を分解するのは大変難しいのですが、その感情のもとをさぐり当てると、その感情を癒すことができると思われます。

心の状態と、真智、無差別智の働き、また、知性、理性、感性、霊性の働きは大いに関係があると思われます。

この秋、野口晴哉さんが、潜在意識教育に関して述べられた「自分との対話」という文章から、自分の現状や取り組む方向性について示唆を受けました。それをすることによって自分を癒すことができると思いました。

「潜在意識教育の面白いことは、自分が自分と会話して、他人と話すのと同じような効果を上げられるということです。新しい人間のイメージを作って、それに注意を集めるとその人になってゆく。自分がこれが本当だという感情をもって、それを肯定してゆくことが効果をあげる方法なのです。」

（「自分との対話」より）

存在の不安、存在の悲哀

幼いころからある、漠とした不安やおそれは、考えてみると「喘息の呼吸困難の恐怖」と「生老病死という存在形式」に分けられると思われます。存在形式は生きていることそのものですので受け入れ、受け止めることしかないと思われます。喘息は10年ぐらい前から出ていません。

最後に、私の好きな池田晶子さんの言葉を記します。

我々がこの地球に存在したことの

意味と目的というのは

考えることによって

その不思議さを自覚することによって

自由になるということになると思われます。

発表 ④

いのちの繋がりの上で

石黒 文子 (61)

自然農歴 30 年

富山自然農に学ぶ会主宰

畑 3 反 (休ませながら 2 反程度作付)

田 1.3 反

毎日、薪でごはんやお風呂を炊いたり、沢水を引いてお茶わんや服を洗ったり、ランプの灯りで本を読んだり、田んぼや畑でその時やることをやっていたら 30 年経っていました。

子供たちや友人や親兄弟、犬や猫たちが、現われたり去っていったり、あいかわらず同じような暮らしをしています。

お陽さまの光や雨や雪や風や、そして石油や電気やガスのありがたさを知ることができた 30 年でもありました。

山で暮らし、自然農をするなかで学んだことはたくさんありますが、ずっと心の中にあったのは「一人で立つ」ということです。

自分の力で進んでいるつもりでも、何かに導かれていたり、導かれていると思っていたのに、ふと気付くと、とても孤独だったり、孤独でありながら孤独ではない。そんな時がありますよね。でも、ひとりぼっちでなければ、探せないものがあると思います。

自然農をするということは、自然との繋がりを見つめ、学び、その中に分かちがたく結びついている自分を感じていく、その繋がりが与えてくれるものを感じる——、ということだと思います。それは、ほんとうにひとりになったときに自分を感じる、そして、いっしょにいるんだなあと感じることができるということですよ。

自然は動き続け、刻々と変わり、姿を変え、形を変え、また現れます。そのどれもが、私と繋がっているのだと。そういえば自然農をやろうと思ったときに気付いていたことでした。ずっと繋がっていくもの——「いのち」。なにもかも「いのち」でした。

すべてのものが「何の役に立つの?」「それはいくらなの?」というものさしではかれる今の世の中ですが、すぐに役に立つのか、今、損か得か、今、合理的かどうか、ということに、すぐ足元をすくわれそうになります。

自然農をやっている、そういうことはおきてしまうんですね。だからこそ、自然に対しても、人に対しても、そして自分に対しても——ありのままをうけとめ、変わっていくことに柔軟でありたいと思います。

そして、身体と心はひとつのもので、心の不調は、身体をたてなおすことで、身体の不調は、心を元気にすることで、ずいぶん変わるなあ、と実感しています。